

[講演要旨]

1923年関東地震直後の京都帝国大学の活動:京都大学に残る記録(2) 救護活動

中西 一郎(京都大学 理学部 地球物理学教室)

第27回歴史地震研究会(2010年9月10日)において、京都帝大による関東地震の学術的現地調査を紹介した。今回は医学部救護班の診療活動を紹介する。京都帝大救護班の活動記録は現在3点存在する。(1)『東京震災録 後輯』(大正15年3月, 東京市役所), (2)『学報 第11号』(大正12年9月5日, 京都帝国大学庶務課), (3)『学友会誌 第28号』(大正12年12月, 京都帝国大学学友会)。

(1)『東京震災録 後輯』(717頁下段)。京都帝大医学部救護班の活動に関する簡単な記述があるが、救護班の京都から東京で救護に従事した場所までの経路及び交通手段等重要な情報の記載がない。

(2)『学報 第11号』(9月5日)。表1に救護に関する記載を抜粋する。原文は縦書き筆記である。

表1:『学報 第11号』(大正12年9月5日)にある救護班に関する記載。

一. 震災救護調査ノ為メ去ル三日本学ヨリ医学部伊藤助教授外三名東京市へ出張
一. 本学ニ於テ震災救護班ヲ組織シ医療材料ヲ携ヘシメ医学部中村教授外21名ヲ本日東京市へ派遣ス
一. 東京臨時震災救護事務局ヨリ大阪府庁ヲ経テ京都府社会課へ左記ノ通知アリ(原文は縦書き) 震災救護用品ニシテ行政庁又ハ公共団体宛ノ物, 罹災民ニシテ罹災地ヲ去ルモノ及行政庁又ハ公共団体ノ証明スル救護又ハ復旧ニ従事スル人員(吏員, 青年団, 在郷軍人等各班ノ人ヲ含ム)ニ鉄道輸送ハ無賃トスル事ニ相成候

(3)『学友会誌 第28号』「医学部救護班の記」(51~55頁)。3資料の中では最も詳しく救護活動の事が書かれている。表2に活動の様子を時系列として示す。表3に救護班の構成を示す。

表2: 医学部救護班の活動(9月4日~9月13日)。

月日時刻	活動内容
9 4 徹夜	医学部救護班編成, 出発準備(便船の照会, 救護材料, 糧食, 等々)
9 5 午前5時	京都駅出発(荒木総長, 足立医学部長, 和辻院長等多数の見送り)
9 5	神戸港で景福丸に便乗 貨車に満載した救護材料を船に積荷, 飲料水(四斗樽5つ, 約360リットル)
9 5 午後2時	出帆
9 6 午後3時	戒厳令裡の芝浦に上陸, 班員による荷揚
9 6	東京市役所, 東京市長に面会, 明日から救護に従事する事に決す
9 6	宿泊所(東京医専, 東大久保), 終夜医員・学生2人宛時間交代で周囲を警戒
9 7	上野公園精養軒で診療を開始 配置: 受付, 内科, 外科, 眼科, 「京帝大救護班開始」の掲示を要所々々に張る
9 7~10	救護活動を続ける 毎日内務省, 文部省, 東京市役所, 赤十字などからの慰問を受ける
9 10	京都市の大規模な救護班が到着
9 10 夕	残りの多数の救護材料を文部省に寄贈, 救護所を閉鎖する事にする
9 11	休養, 始めて単独行動を許され, 各自親戚, 知友の安危を見舞う
9 12 払暁	出発, 芝浦から軍艦平戸に便乗し, 帰途に就く
9 13 夕	大阪に上陸
9 13 夜10時	京都駅に着いて解散

表3: 救護班の構成。

班長	中村教授
医員	平山学士 土屋学士 坂田学士 塚原学士 長谷学士
学生	岩田秀夫 石神順三 新田一衛 中村良太郎 中村学文 目下公平 前田謙次郎 間島英夫 小室昌義 北島勲 木村潔 以上11君 小川五七郎 村尾立平(以上両君東京にて参加)
事務員	安藤書記 小使2名
	今村教授 藤浪教授: 行を共にし, 主として諸官庁との交渉, 救護班の連絡等に任ぜられた